

氏名	皆川 俊平
ヨミガナ	ミカガリ シュンペイ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第423号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 星座的鏡面体 — “渡り” のための方法論 〈作品〉 星座と鏡 revrese mountain 山を釣る。島を運ぶ船は沈んでいく。 皮膚から皮膚へ outemet

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	坂田 哲也
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	O J U N
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小山 穂太郎
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	秋本 貴透

（論文内容の要旨）

本論は絵画論である—こうしてルールを定めたのは、本論が実際の絵画についてのみ述べるとは限らないため、絵画論と定義付けを行なわなければ、本論の行く先を、読む者（それは書く側である私も）は見失ってしまいかねないからであった。

私の絵画制作は、絵筆を持ち、キャンバスに向かい、油絵具で描画を行うのみではなく、絵画を描くのに必要な動機、必然性といった、絵画を描く以前のものごと（メタ）への探求から始まっていた。この探求のプロセスがそのまま、さまざまな技法・素材を用いた多様な作品となって展開されてきた。

本論の主題にある〈星座的鏡面体〉とは、こうした私の絵画制作方法を表したものだ。〈星座〉とは、散在する点のような状態にある多様な制作の動機・必然・プロセスを、群体として繋ぎ合わせることを意味し、また〈鏡面〉とは、絵画が孕む鏡像的性質へのメタファーから派生し、作品が社会や環境といった要因を反映している状態、私自身と社会や環境などとの関係性を表したものだ。

〈星座的鏡面体〉は、私の絵画制作の総体を捉えるものだが、しかしこれを客観的に論述するには、従来の絵画という枠を越えなければならなかった。このことから、絵画という枠組みの越境を意図し、本論の副題を〈“渡り”のための方法論〉と名付けた。しかし本論における越境は、美術史で何度も繰り返し行われ語られてきた、古典から近代、そして現代美術の発生といった様式的越境ではない。リアリティ（現実認識）の所在にもとづいた、私の制作における独自の越境性を“渡り”と称した。

本論は大きく分け、3つの構成からなる。1章での問題提起を受け、2章と3章が〈呪術〉についての考察となり、4章と5章が〈呪術〉的实践と捉えられるアートプロジェクトについての考察、そして6章で自作の展開を交え、〈呪術的〉見地からの表現-表層の奥に隠されたメタ群体の表出-〈星座的鏡面体〉とした。

1章で提示される問題は、写実性によるリアリティへの懐疑である。絵画は長らく写実性を立脚点にリアリティを構築してきた。今日でも〈写実的であること〉が、絵画をはじめとした視覚表現において最重要なリアリティの源泉となっている。これを端的に表すキーワードが〈鏡〉であった。しかし、〈鏡〉に映されたラス・メニーナス像は、果たして現実であるのか。ベラスケスの《侍女たち》を呼び水とし、絵画が孕む鏡像

的性質への懐疑、リアリティの崩壊を読み取り、そして〈鏡〉とは異なるリアリティの存在へと向かい、思考を開始した。

2章と3章では、1章での問題提起を受け、〈鏡〉とは異なるリアリティを探し出した。

2章では、〈鏡〉とは異なるリアリティへの糸口に、古代文明や民間信仰に見られる〈呪術〉を挙げた。

〈呪術〉を用いて、美術の社会的価値のリロード（再読み込み）を行なったが、これによって〈憑依のリアリティ〉の存在を明らかとした。

3章では、2章で提示した〈呪術〉における越境性-同化・憑依-の裏付けとして、八重山諸島やミクロネシアなどといった島々などへ旅をしたエピソードを挿し入れ、〈憑依のリアリティ〉を具体化した。また〈呪術〉の見地にもとづいて〈マチスモとフェミニン〉、〈痛み〉、〈ディアスポラ（故郷流離性）〉といったキーワードで、現代美術における表現を読み解き、〈憑依〉の本質としての〈死者のリアリティ〉へと結んだ。

4章と5章では、〈呪術〉の今日の姿として、アートプロジェクトについて述べた。

4章では、続く5章で本論筆者の私が行なうWATARASE art Project (WAP) を読み進める基礎資料として、アートプロジェクトの類型化を行い、5章ではアートプロジェクトの主宰と実践についてWAPを事例に述べた。5章では、取り立てて2・3章で導き出された〈憑依のリアリティ〉に起因した論述を中心とはしなかったが、WAPという場においてアーティストという主体が、外部や周囲と〈協働・反転・伝染・投影〉されていくさまは、〈呪術〉的越境性に相当し、また絵画の内／外を越境する“渡り”へと繋がる。また5章では本論筆者でありWAPの主宰者である私を〈ミナガワ〉という〈物語の登場人物〉にすることで客観視を試みた。これは〈鏡に映る私（現実）を見る〉という、絵画の鏡像的性質を利用したものであり、続く6章（結論）への長い“渡り”となった。

そして、6章において、結論—星座的鏡面体—として、“渡り”を続けた私の絵画制作をまとめた。自作の展開・変遷を交えつつ、『アリスの物語』による〈鏡〉の矛盾に突き当たる。しかしこの矛盾こそ、〈憑依〉という今日の新たな（しかし実は古代から続く）リアリティが存在していることの証明となった。

渡り鳥は、飛び発った土地へと再び戻ってくる。私は渡り鳥に思いを馳せながら、絵画の外へと旅に出たつもりであった。しかし、帰る約束をして旅立った場所は本当に絵画の内であったのだろうか。渡り鳥がときに〈星座〉をコンパス代わりに用いることがあるように、本論は、絵画という〈鏡〉から始まった私の制作の変遷—“渡り”—が、〈星座〉的に繋がれることによって現代のリアリティの所在を示したものだ。

〈星座的鏡面体〉は、私の絵画制作方法であるとともに、現代のリアリティを再構築する旅のための地図—“渡り”のための方法論—となった。

（博士論文審査結果の要旨）

本論文は、「見る／見られる」という関係上に、写実性によって成立してきた絵画のリアリティが崩壊した現在、写実にかかわる始原的な呪術性に新たな絵画のリアリティを求めようとする筆者の試みを論述したものである。実際の内容は、絵画以外の内容が大部分を占めているが、これは筆者が、本来呪術的行為が分化して現在の宗教や思想、芸術（その中の美術や絵画）といった各分野があると考え、その各分野を“渡る”ことで、絵画の新たな呪術的リアリティの可能性に迫ろうとしているためである。高い問題意識による論述は、大部ながら誤字脱字のない読みやすい文体で、それ自体リアリティの強い論考になっている。

論文タイトルの「星座」は、暗中を進む目標としての視座であり、個々の星は各分野、星座は全体としての呪術性を示唆する。「鏡面体」は、現実を映す鏡としての絵画を意味し、サブタイトルの「渡り」は、前記のアプローチの方法論を示す。全6章の構成は、第1章で問題提起、第2章「呪術考」で呪術と芸術の関係を分析。第3章「境界考」でそれを沖縄や八重山諸島、オセアニアなどで行なったフィールドワークについて述べる。そして第4章「アートプロジェクト」で、近年盛んなアートプロジェクトがもつ“協働性”に、呪術性に重なる可能性を見出し、第5章で実際、筆者がこの数年群馬県のわたらせ鉄道沿線で行なってきたWATARASE Art Project について述べている。各章、その歴史と現在の関係を見極めながら論考を進めてお

り、民俗、風習から現代美術まで幅広い事例を整合的に関係づける洞察力と構想力は高く評価できる。最終的には、“協働”による自他のリアリティの同化に、アートの新たな可能性を見出している。

筆者自身「おわりに」で言うように、ここでの“渡り”は絵画の新たな可能性に向けた“外部”の論考であり、絵画そのものへの論考が乏しい感は否めない。しかし「星座的鏡面体」としての絵画のあり方を常に意識した論考にはブレがなく、その点での不足感は感じさせない。とくに各章、読みやすくコンパクトにまとめていく論述力には、筆者がこれまで行なってきたプロジェクトで、多くの申請書、広報、報告書等を作成してきたであろう実務経験も十分に反映されている様子が窺われる。また第4章での近年のプロジェクトの傾向分析では、それが地域のためかアートのためかという、重要な問題提起が行なわれている。

審査会では、問題設定、洞察力、行動力、構成力、論述力に、高い評価が与えられた。学位論文にふさわしい内容として合格と判定された。

(作品審査結果の要旨)

皆川俊平の作品と論文は実作品の絵画「reverse mountain」、インスタレーション「閾/threshhoid」、立体「道祖土神社」、舞台美術、映像、古典絵画（「ラス・メニナス」ディエゴ・ベラスケス）、文学、アートプロジェクト「WATARASE Art Project(WAP)」など長期に渡り広汎な領域を横断し実践され、展開・連続・移行の経緯のなかで緻密に編まれた一つの織物の様相を帯びている。論文においても前半部では様々な自他作品や自身が中心的牽引者として継続展開してきたアートプロジェクトの体験など豊富な研究と実績を踏まえた上での芸術表現の今日的課題、批評及び将来的展望と予見などを行い読み応えのあるものになっているが、5章では自身を「ミナガワ」という作中人物におき変えて登場させ、物語形式で論を展開している。これは皆川が本論で展開している鏡像問題で引用している「ラス・メニナス」の鏡に映りこむ画家自身の役割と意味に呼応させる実験的試み（仕掛け）として極めて高度な知的遊戯性を備えている。実作品では立体作品の「道祖土神社」(WATARASE Art Project)、畑の中に唐突に置かれた一見“まがい物”風な道祖神の社。これは私たちの住み暮らす地域の境界意識を顕在化する一種の装置として制作されたが、図らずも近隣住民の賽銭やお参りなどが自然発生的に現実化するなど信仰の発生と習慣化のプロセスにも触れるものとなった。また皆川が制作し続けている絵画作品にも触れてみよう。「reverse mountain02,03」と2点对になっている山が描かれた絵画作品がある。皆川が「絵画」の外で行為し思考してきた非絵画的イメージやリアリティの数々を絵画の中に取りこんで視覚化するという試みの作品である。本作品は、非絵画的リアリティに絵画という“仮面”あるいは“装飾”を施すことによって、リアリティそのものを異化するその「あわい」や「閾—しきいき」を体験させる『方法の創出』が目的として制作されている。作品を子細に見ると、両方の山のそれぞれは山の隆起を想わせる形が描かれているが描き方を変えて2つのイメージを描き分けている。一つはドローイング的な要素の強い描き方。もう一つは写像的なリアリティを感じさせる描き方で、2点の絵が並置されることによってどちらからどちらへとイメージの変成を想わせるが同時に共通してあることに私たちは気付かされる。それぞれの山の部分かしこに点々と紅白の色点が描き込まれている。山を見ていてやがてこの色点に気付くと山が見えなくなる、そして再び山（イメージ）が回復される。点滅するように山と色点が交互に入れ替わり見えるのだ。これはどういうことかと言うと、私たちは山を見ると同時に実は「絵」を観ているのだということに気付かされるのである。私たちの或るイメージそのものが「絵」のなかでどのようにコントロールされてそのイメージを獲得しているのか、その組成と回路を眺めていることを了解させられるということなのだ。また図像はロウカンバスに描かれており、下地に施されているメディウムは透過皮膜をつくり裏の木枠の影を画面上にぼんやりと透けて見えている。皆川は、“見えること”と“見えにくいこと”、“見せること”と“見せないこと”を同時に絵に描きとどめることによって、絵と私たちのイメージの間に橋渡しをしようとしているように思える。展示空間は皆川が多年に渡り制作されてきた作品が至るところに設置された。絵画、映像、そして言葉が空間全体に浮遊しつつも処を得、さながら星座的配列を想起させ場と感情を豊かに起ち上げていた。これら一連の展示は、皆川の長期に渡るプロジェクトと思考と制作のなかで人と場に関わりその体験から問いと独自の方法が生み出され諸作品に反映されたものとして私の目に映っ

た。論文主査の佐藤道信先生は皆川の論文を精査した上でその独自性と緻密な論証を高く評価された。主査である坂田哲也先生、副査の小山穂太郎先生も皆川制作研究への情熱と粘り強さと周到さ、その結果としての諸作品の成果を高く評価された。作品第一副査を務めた私も皆川俊平の論文及び作品においてその実績と藝術的資質を高く評価して今年度博士号取得に相応しいものであると判断するものである。

(総合審査結果の要旨)

本論文及び作品の作者である皆川俊平は、東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程油画研究領域の学生として第六研究室に所属している。本論の主題にある「星座的鏡面体」というテーマで絵画を描く以前のものごと、つまり「“渡り”」によって得られる旅を通じての探究から始まる様々な過程を論文と作品に表している。“渡り”のため作者のとった方法論は油画研究領域という枠組みを越え、種々のテクスチャーを用い、複数の作品によって表現されている。絵画による「reverse mountain」、「山を約る。島を運ぶ船は沈んでいく」、「outernet」、映像インスタレーション「閾/threshold」、写真による「星座と鏡」、立体「道祖土神社」、ドローイング「皮膚から皮膚へ」など、絵画表現の展開と移行と経緯を踏みながら、極めてクオリティの高い作品にまで高めている。審査会場の大学美術館ではさながら星座のように壁面最上部から床に至る所まで作品が展示され作者の熱意が伝わる見事な展示空間となっていた。

本論文では作者が現地に身を置き、粘り強い取材によって得られた体験を各論章へとまとめ、呪術、文学や古典絵画にも触れ、リアリティへの問題を第1章で展開させ、本論文の基礎ともなるべき第2章では呪術と芸術。第3章では境界考へと続く。第4章ではアートプロジェクトの問題点。さらに第5章では作品の核となるWATARASE Art Projectへと続く。皆川は芸術活動の一担であるアートプロジェクトのチーフプロデューサーとして組織運営をし、牽引してきた。第6章として星座的鏡面体の結論-論証をしていく。

展示発表の絵画作品についてふれてみると、まず皆川作品の主作品ともいえる絵画、「対」をなしている「reverse mountain 02,03」は突起した山一つずつがロウキャンバスにそれぞれ描かれている。様々なプロジェクトや思考したイメージ、リアリティを求め“渡り”を続けた体験が消化、象徴化され、絵画という表現の中に取り込んで表出された作品である。30点もの中の集大成で、最後に描かれた作品である。この2点の山は相対的に描かれており、一作品はより写実的表現で、もう一作品はドローイング的表現でなされている。2点を並列展示する事で見る側が両方を複眼的に鑑賞できる仕組みになって効果的である。しかし両方の二作品に共通する描画は、街の灯りのように点在する赤と白の点描である。イメージと現実が合致し、二つの回路を巡るうちに次第に両方を同時に見るような仕掛けになっている。技法材料においても実験的な試みをしていて、やや荒い麻布そのものにメディウムを塗り半透過による支持体を作り、微かにキャンバスの木柵を見せて「見せる」もの、そうでない「見える」ものを同時に視覚的表現をしていて、独自の表現を試みているのである。

また映像インスタレーションで興味深いのは群で生息する羽蟻の行動を長回しで撮影した作品である。繁殖期の雄蟻は背中に羽根が生えるという。その短い期間に作者がその時期に滞在した日光市足尾町の森の中で撮影したスローモーションの映像である。無数の羽蟻がまるで落葉が動くように、地表で羽根をはばたかせる様は劇的で感動すら覚えるものである。これも皆川の粘り強い性格と周到な準備がなせる業であり全審査員を驚かせた。また写真作品では皆川が沖縄の最南端、波照間島への“渡り”によって捉えた作品である。防風林と化した波打ち際に群生する植物の圧倒的な息づかいを大画像にして展示した。

皆川は自らの脚で日本から異国へ、異国から日本へと“渡り”によって獲得した生への場面を、独自の方法論で論証し作品に変換したといえよう。栃木の赤倉近くの住居を拠点に、南はマイクロネシア諸島、コスライ島とポンペイ島、台湾。日本では沖縄、波照間島から北は宮城まで往来した。数回にわたる論文審査中は絶えず展示発表する予定の作品と、徐々に完成に向かう新作を並べて行った。皆川の論文は論文最終稿の上がりが高く、実技専攻学生としては異例であった。

皆川俊平は博士在籍期間の五年間を有効に活用したといえる。「星座的鏡面体-“渡り”のための方法論」本論文187ページ、展示作品30点は論文主査である佐藤道信教授もその精緻な論証と文章力を高く評価され、

作品主査のOJUN准教授他、副査の審査員も伸びやかで色彩豊かな実験的絵画作品を課程博士の学位論文、作品に相当するものであるとされた。故に全員一致で合格と判定することにした。